

平成 27 年度第 1 回博物館懇談会議事録

日 時：平成 27 年 11 月 18 日（水）17 時～18 時 45 分

場 所：野田市市民会館 雪月桃の間

出席者：懇談会委員・生田武士（～17 時 30 分）、宇佐見節子、沼野秀樹、茂田井宏、米川幸克。郷土博物館館長・関根一男、同学芸員・柏女弘道、岩田明日香、寺内健太郎（書記）。

1、特別展「生誕 180 年 押絵師 勝文齋～野田にやってきた江戸・東京文化～」について

●特別展「生誕 180 年 押絵師 勝文齋～野田にやってきた江戸・東京文化～」展示見学・説明

岩田学芸員より博物館展示室にて展示解説を行った（議事録省略）。その後市民会館雪月桃の間に会場を移し、補足説明と意見交換を行った。

●補足説明及び意見交換

岩田：それでは開催概要や関連事業の話をする。まず、10 月 17 日（木）から 11 月 13 日までの集計で、入館者は 3,880 人、1 日平均 155 人となっている。ポスターも目立つようで、遠方からの来館者もいる。

岩田：後ほど回覧するが、展示開始と同時に新聞の取材があり、読売新聞・産経新聞・東京新聞に掲載されたこともあって、多くの方に来ていただいている。また、展示開始 2 日目に NHK の取材があり、展示の様子が首都圏ニュースで放送された。放送翌日からさらに来館者が増えた。今回の入館者数の伸びは NHK の力も大きいと思う。

委員：入場者数云々ではなく、マスコミが取材に来たのはすごい。

岩田：NHK が取材に来たのは数年ぶりである。押絵行灯の再現展示をした壁面を映してくれたため、来館者は、壁面を観に来ているようだ。

岩田：関連の催しとしては、まず、法政大学総長の田中優子氏による「連と通人ネットワーク」を関連講演として行う。先ほど展示室にて、文化人のネットワークの中で勝文齋の作品が作られて野田に残された、という話をしたが、明治時代に新しく作られたというよりも、江戸時代から続くネットワークの中でのことである。田中氏には江戸時代の文化人たちの交流、ネットワークの話をしていただく。

岩田：また、ワークショップ「初めての押絵作り」を 11 月 21 日（土）に企画している。講師の宮脇豊子氏は、押絵作家としてご活躍されているが、博物館 2 階に展示されている「野田醤油醸造之図」の修繕をした職人の弟子で、当時野田にも来ている。そういったご縁もあって今回お願いした。どちらも定員を超える申し込みが来ている。

委員：特別展のギャラリートークは力を入れてやった方がいい。

岩田：ギャラリートークは 7 回企画していて、現在 4 回目まで実施した。参加者は第 1 回が 7 人、第 2 回が 13 人、第 3 回が 5 人、第 4 回が 6 人ということで、複数回実施している

割には、まずまずの人数だと思う。少ない時は参加者が1、2人のこともある。

委員：押絵行灯は何ととっても博物館の目玉。また、5年か10年経ったらやれば良いと思う。来年でもいいくらい。

岩田：来年は琴平神社の大祭もある。

岩田：今回、「押絵行灯が野田にあったなんて知らなかった」という来館者が多いので、知ってもらえるのはすごく嬉しい。

岩田：アンケートの結果は、11月13日まで開館日数25日の時点で147枚あり、回収率が3.7%となっている。みなさんからのご意見を受けてアンケート回収に力を入れている。今回の特徴としては、回答者の5割が女性である点が当館の展示としては珍しい。年代はいつもと変わらず60～70代が多い。職業とあわせてみても学生の世代の割合はかなり少なくなっている。

委員：リピーターの数についてはどうか？

岩田：初めての来館者が39%で、いつもよりリピーターの方が多いという結果が出ている。話を聞いてみると、NHKを見て近所だったから来てみた、という方がかなりいた。

委員：NHKはどこで展示の開催を知ったのか？

岩田：市で定例の記者発表をやっており、博物館の展示も紹介するのだが、その時にNHKの方も来ていて、そこで知ってくれた。

委員：それはよかった。

委員：他館では、展示開始前日にマスコミを呼んで解説をやる。多くの記者が来るらしい。

柏女：メディア向けに内覧会をやるには、前日には展示が完成していることが条件になってくる。

委員：琴平神社と協力出来るといい。

岩田：柏屋さんにはご協力いただいている。例祭の会場でも柏屋さんが図録を来場者に見せてくれていて、琴平神社の方からこちらに来た方も多かったようだ。また、展示を観て「琴平神社は今も見られるんですか」とか「行ってみたいのですが、どこにありますか」という質問が大変多かったので、11月9日と10日は菊花祭をやっているとか、普段も遠くからだったら見られますよ、というご案内をしている。

館長：来年は12年に一回の大祭ですから、それに合わせてやるという選択肢もあったかもしれない。

委員：メディアミックスが大事だ。

委員：今回の特別展を踏まえて今後そういうことをやっていけばよいと思う。

委員：3年後くらいに「毎度お馴染み押絵展」とかやったらいいのではないか。

岩田：川間など野田地区近隣以外の方だと、琴平神社がどこにあるかも知らなかったという方が多いので、それを知っていただく機会になったと思う。生まれも育ちも野田だけど琴平神社を知らなかったという方もいた。

委員：普段は入れないから知らない人もいるのだろう。本町通りに入る道も風情がある。

岩田：今後また、より一層協力していけたらいいと思う。

岩田：どのようにして開催を知ったかという項目で、いつもに比べて「その他」が多い。記述を見ると、NHKを見て来た方が多かった。今回は広報の面でNHKに大いに助けられた。

岩田：印象に残った展示物としては、「押絵すべて」と書いている人が多い。やはり41点を一度に観られたことで驚いている方が多かった。

委員：みんな押絵といったら羽子板しか見ていない。

岩田：行灯というのが珍しい、という感想もあった。

岩田：普段は割合として少ない女性の方にも喜んで来ていただけていて、一人で来た後にまた友達を大勢連れて来てくれたりもしている。展示室がいつもより賑やかで、楽しそうにおしゃべりしながら観ているのが大変よかった。野田に押絵行灯があったとは知らなかったから広めたい、という方も多い。

委員：話は逸れるのだが、懇談会の議事録が詳しすぎても誰も読まないから、どういうことを討議したかということだけを書くサマリーだけでいいのではないか。

委員：でも、詳細を載せた中に良い意見があるかもしれない。

委員：ホームページに長文を載せても読んでくれない。だから、議事録のサマリーだけをホームページに載せてほしい。あと、出来たら『年報・紀要』の方に懇談会の詳しい議事録を掲載してもらいたい。更に、懇談会を受けて郷土博物館が対応した点を載せると良い。

委員：以前の懇談会で、野田の生活文化展がマンネリ化していると指摘したが、まだまだ改善されているようには感じられない。委員の意見に対して郷土博物館がどのような対応をするか、というような会話のキャッチボールが無くてはいけない。また、『年報・紀要』に掲載することで、懇談会で市民の方から意見を引き出し、郷土博物館としてそれをどのように活用していくか考えている、ということ積極的にアピール出来る。

委員：まとめて要点だけ出してあればよいのではないか。

柏女：議事録をどのように公開するか、というのは非常に大事な問題。簡素にすることはできる。当館の『年報・紀要』では、事業系は入っているが、会議に関するものは結構抜け落ちている。

委員：他の博物館などは、そういうものを積極的に載せている。やはり市民との交流がある、ということがステータスになる。意見を聞いて結構でした、で終わってしまうのではだめだ。

柏女：このような話は、2013年度『年報・紀要』の際に話をしたが、結局、博物館懇談会は組織図には載らなかった。

柏女：組織図にどのように入れるか、という話が出たのは間違いない。博物館懇談会を開催したことはカレンダーには載っている。内容については今後、検討していきたい。

岩田：特別展に話を戻すと、みなさんに楽しんでもらいたいということで、ドグウのミミーというキャラクターを郷土博物館で売り出し、缶バッジとして販売したりパネルに登場

させたりしている。今回は、特別展に合わせて歌舞伎バージョンのミミーにした。また、60代70代のお客様から「缶バッジはつけない」という要望が多かったため、今回はマグネットにした。先ほど観てもらった押絵のなかに「暫」という演目があるが、それと同じ限取をさせたものになっている。意外とインパクトがあるのか、「普段のミミーよりもかわいい」と言われて買っていかれるお客様もいる。マグネットだったら使える、ということで大好評発売中となっている。値段は一個100円。

岩田：特別展に関する報告は以上です。

関根：みなさんからご意見をいただきたいと思います。

委員：なぜ行灯に明かりをつけないのか。薄暗いところに行灯を置いて、レプリカでもいいから電気をつけてほしかった。宵のお祭りの雰囲気が出ると思う。

委員：資料は電球の明かりでも劣化してしまうので、おそらくやるとしたらレプリカを作るなり何なりすると思うが、何しろ、絶対的に、明かりが入っているものを観たい。まずそれが一点。

委員：次に、琴平神社との繋がりがあって奉納されているものなのに、その琴平様があまり紹介されておらず写真が数枚展示されているだけで、茂木家との繋がりが全然わからない。要するに、野田との繋がりが全然わからない。せっかく郷土のことをやっているのに、野田の人々を疫病などから救うために奉納したというくだりも全然ない。その辺の繋がりの説明があった方がよいのではないか。

委員：もう一つは、押絵を観ていると「どうやって作ったの？」という興味が湧くと思う。押絵の作り方を説明したパネルが写真で何枚かあったが、その辺をもっと詳しくした方がよかったのではないかと感じた。

柏女：例えば、作っているところの動画が展示されているとよいですか？

委員：やはり、制作過程がわかるもの何個かあるだけで全然違うだろう。

委員：ミニチュアでもいい。

委員：あの纏まった写真だけでは頭のなかでうまく繋がらない。

柏女：やはり、このパーツはこれで、というように実際のモノがあって、ということですね。

委員：本当だったら、それでレプリカを作って、それに灯が入っていれば最高だったと思う。LEDを入れたりとか。

委員：LEDか何かでやれば火事にはならないのではないか。

委員：今は蠟燭みたいに揺らめくLEDが売っている。

委員：あの辺の照明をちょっと薄暗くして。

委員：蠟燭みたいにゆらめくといい。

岩田：博物館でも蠟燭形のLEDは購入している。写真パネルで展示しているが、あれは実際に火を入れたのではなくLEDを入れて撮影した。やはり、資料の状態を第一に考えると長期間電気を通すことは出来ない、と判断した。

岩田：レプリカを作るということも検討したが、やはり色合いなどが本物とかなり違ってしまふので、本物の良さはレプリカからは出せない。和紙ひとつから漉き直すと大変値段も掛かってしまう。押絵行灯の再現展示をした壁面には、本物を飾りじっくりと観ていただきたい、という考えがあった。しかし、やはり灯りの入った行灯を観たい、というご意見もアンケートにあったので、今回は違う形で何か工夫が出来たらと思う。

委員：専門の方をお願いしてみたらどうか。

柏女：(図録を見せながら) 写真を撮るときだけ LED を入れてみた。

委員：やはり、明かりを入れると劣化する可能性はあるか。

柏女：ずっと当てておくというのは、やはり良くない。博物館としても、この展示をやる際に、灯りを入れたいという話にはなった。

委員：あまり光のエネルギーが強くないものであればどうか。柏屋さんでも行灯をやっているのではないか。

柏女：押絵行灯は昭和 43 年のお祭りまで飾られていた。その後、博物館の方に寄託という形となって平成 6 年に寄贈となった。

委員：私としては、お客様もたくさんお見えになって、やった甲斐もあったし、良い企画だったと思う。

委員：人が来れば次につながる。

委員：(図録を見ながら) 蝋燭型の LED を入れて撮影したとのことだが、こんなに明るく光るのか、と思った。

柏女：それは、カメラの設定を調整しているためだ。

委員：そうか。普通はこんなに明るくならないので。

委員：退色については、国立博物館等に聞けばどのくらいの照度だったら大丈夫だとか、教えてくれるだろう。

岩田：照度は現在の明るさでもかなり限界に近い。

委員：あの部分だけ薄暗くして、茂木本家美術館のように光の影響を受けやすい資料のコーナーにカーテンをするとか。また、博物館で江戸時代の展示をするときは、薄暗くして当時の照明の様子を再現して見せるのが今流行っている。

柏女：区画を区切ってそこだけ暗くするという方法はあるかもしれない。

岩田：琴平神社との関係についての説明が、パネルでの簡単な紹介となってしまったのは、確かに一つ反省点だと考えている。

岩田：押絵をどうやって作るか、ということについては、実演会など出来ればよかったと思う。展示でも押絵作りの様子をきちんと紹介できればよかった。どうやって押絵を作るのかという質問もあると考え押絵作りワークショップを設定した。ただ、展示を観て分かりにくい、という意見は他の方からも頂いているので、次回の展示に活かしていきたい。

委員：勝文斎の展示は何年ぶりか。

柏女：展示室 1 階を使つての全点公開は平成 4 年以来のこと。平成 11 年には展示室 2 階を

使って 20 点ずつ 2 回に分けて展示した。全点を一度に展示したのは 23 年ぶり。

委員：今回の展示は企画的にはいい。どうしてもマンネリ化するので、オリジナリティを出すようにすると、当たった企画はもう一度やるくらいでないといけない。同じ押絵行灯でもいろんな切り口ができれば、全く違った展示となるだろう。モノとしては一級品で常設しても良いくらい。醤油産業とも無縁ではない。

岩田：好評につき第二弾、という形でやることも出来る。今回は、前の展示から期間が空いているので、まず野田の方に押絵をじっくり観てもらおう、ということ意識した。そのため総体的で、何かに特化した展示とはなっていない。全体的な紹介となった。

委員：古くから野田に住んでいる人は物足りない。それこそ、ミニチュアの行灯を作って博物館に並べたっていい。あとナイトツアーをやるとか。そうことをやるといろいろな商品が出てくる。そうすると楽しい。外に行灯を並べるといい。

岩田：本当の職人さんに頼むと高いが、ただの飾りにすればそれほどの値段でもないだろう。

委員：まずはお金のことを考えず、計画を立ててみて、そのなかでお金の計算をすればよい。

関根：最近レプリカだけでなく壁に光を映し出すような方法（プロジェクションマッピング）もある。

委員：いろいろな方法を試してみるとよい。

岩田：博物館がしっかりと企画をしていくことが大事だろう。

2. 市民の文化活動報告展「おばあちゃん、おじいちゃん これ、な～に？」について

柏女：特別展後の冬の展示は大貫学芸員が担当する。「なつかしの道具探究会」という博物館の講座から生まれた市民のグループによる展示。炭火のアイロンや火のし、黒電話、交換式の電話など、生活道具をいろいろと調べている方が展示をする。

委員：体験の企画をしたほうがいい。

柏女：タイトル案は「おばあちゃん、おじいちゃん これ、な～に？」という子どもを意識したものとなっている。チラシも子どもをイメージしたものにするつもりである。

委員：他の博物館でも同じようなことをやっているのだから、それと同じになってしまう意味がない。

柏女：他は博物館が主体となって展示しているが、当館の展示は、市民の方々が調べてきた成果を発表するもの、という点で差別化できると考えている。解説なども市民の方々が書くので、その方々の体験談などが活かされたものとなる。また、電話や火のしなどを体験する企画も考えている。

委員：できれば、探究会の方に小学校へ行ってもらってデモンストレーションをしてもらえばよい。

柏女：もともと、3年生の冬に「昔の暮らし」の単元があるので、学校見学の団体が来てく

れる。これまでも探究会のメンバーと一緒に対応したこともあったが、今年は展示を観てもらうことになる。

関根：そろそろ時間になりますので、これにて終了とします。貴重なご意見ありがとうございました。